



この秋、ワシントン条約の会議が開かれます。

今年2004年10月2～14日に、第13回ワシントン条約締約国会議がタイのバンコクで開催されます。それに先立ち、トラフィック イーストアジア ジャパンは、締約国会議に向けて約10回のシリーズでワシントン条約関連情報を各マスメディア関係者の方々に配信することにいたしました。会議に関する正確な情報の入手や取材の参考としてお役立てください。また、ご不明な点や詳細に関してはトラフィックまでお問い合わせください。

●下記の内容を転載する際には、トラフィックジャパンまでご一報ください。

今回のテーマは日本の香り

●リッコクゴミとバビブソク

これらは香道で使う言葉で、六国五味と馬尾蚊足と書く。今回の会議で提案されているアクイラリア属 *Aquilaria* spp. は、日本でお線香やお香の原料として広く利用されている沈香をつくる樹木である。日本では輸入することでしか手に入らない貴重な沈香の香りを、日本人は、六国五味（匂いの特色を六つの品質と五つの味覚で表した）に分類した。伽羅（きゃら）はこの最上級品である。そして、蚊の足のような小さな木片や粉であっても大切に扱ってきた。

●香道

香道というのは香りを楽しむもので、それが芸術にまで昇華した世界でもユニークな日本の文化である。その香道の中心的な香りが沈香で、沈香がなければ香道自体がなりたない。



沈香と自然環境

沈香とは、様々な外的要因によってアクイラリア属や *Gyrinops* 属などの樹木の木質に樹脂が沈着したものの。いまだに沈香生成の過程は謎であり、人工的な栽培が試みられているものの、成功にまではいたっていない。

沈香は木によってそれぞれ香りが異なる。これは、外的要因の違い、周辺環境の違いなどによるのではないかとされている。その自然環境でなければできない。まさに豊かな自然の産物、象徴である。香道ではこのそれぞれの個性的な香りを楽しむ芸術であり、この個性があって成り立っている。



沈香は、豊かで多様な自然と持続可能な利用の象徴である。

日本人がはぐくんできた日本文化も、海外の野生生物によって成り立っている。

今回の会議をより詳しく理解するための【TRAFFIC Briefing】の日本語訳をサイトに掲載。

日本の沈香輸入量

日本の沈香の輸入量 (1991～1998年)

年	輸入量 (kg)
1991	36,848
1992	35,141
1993	33,189
1994	28,446
1995	55,873
1996	34,608
1997	30,951
1998	22,340

出典：財務省、貿易統計

※1999年から関税コードが変更になり、沈香単独の数値は把握できなくなった。

2000年（現在入手できる最新データ）の日本のマラッカジンコウの輸入量
チップ：6,879.14kg
粉末：1,050kg
形態が不明：252kg
(経済産業省のワシントン条約年次報告書より)

ワシントン条約では現在マラッカジンコウ *Aquilaria malaccensis* のみが掲載されているため、識別が難しく取引形態も多様であるアクイラリア属全種の取引状況を把握することは難しい。

今回の提案は

沈香の原料であるアクイラリア属全種と *Gyrinops* spp. を附属書Ⅱに掲載する。

(提案国：インドネシア)



これら2つのインドネシア・マレーシア産の属には、香木・薬剤・文化的用途のために高い価値を持つ樹脂性の沈香を生産する主な樹種が含まれる。

■トラフィックはこう考える

中東とアジアにおける現在の需要のほぼすべてに、管理されていない野生から採取した株が使われており、結果、その多くが減少している。違法採取と取引も報告されている。また近年、*Gyrinops* 種の取引が急増した。

マラッカジンコウが1995年以来、すでに附属書Ⅱに掲載されている。しかし、沈香の識別は非常に困難なため、効果的にワシントン条約を施行するためには、これらの属に分類される他の種も附属書Ⅱに掲載する必要がある。

注釈を付けて賛成

トラフィックジャパンの
ここに注目

6

香りの日本文化と
持続可能な利用